

# 比較することによって見えてくること

山本 浩\*

日本語を母語として育った日本の子供たちは、中学校に入って初めて英語に触れて、日本語と英語の大きな違いに気づかされる。日本語の名詞には単数と複数の区別はないのに、英語で名詞を用いるときには単数形と複数形を区別しなければならない。英語の文章では、動詞の前に必ず主語がなければならないのに、日本語の文章は主語がなくても成立することが多い。日本語では自分を表す言葉は「わたし」「わたくし」「あたし」「おれ」といったように数多くあり、状況によって使い分けるが、英語には“I”だけしかない。このように日本の中学生たちは、母語である日本語と、初めて勉強する外国語である英語とを比較することによって、日本語と英語の違いに気づかされ、日本語の特徴について意識するようになる。韓国の中学生たちも同じで、英語の文章の語順と韓国語の文章の語順が大きく異なっていることや、英語では主語なしの文章は成立しないのに対して、韓国語では主語なしの文章が成立するといったことをはっきりと意識するようになるのは、中学に入って英語を勉強するようになってからである。

同じように、日本の中だけにいては日本のことはよく分からないと言われる。一度、日本を出て外国に行き、その国にしばらく滞在したり暮らしたりすると、初めて日本のことがよく見えてくるのである。その国と日本とをいろいろな面で比較するようになり、それまで気づいていなかった日本のさまざまな点について初めて意識し理解するようになるからである。もちろん、これは日本人だけのことではなく、日本に滞在する韓国人についても同じことが言える。日本に滞在していると必ず日本と韓国との相違に気づかされ、それまであまり意識しなかった韓国のさまざまな点に客観的な目を向けることができるようになるのである。このように、日本語しか

---

\* 上知大学文学部英文学科教授

知らない日本人は日本語について深く考えることはないし、韓国しか知らない韓国人は韓国について深く理解することはない。ある一つのことしか知らない人は、そのことを深く知ることはないのであって、それまで慣れ親しんでいてよく知っていると思っていたものも、別のものと比較したときに初めてよく見えてくるのである。比較という視点が重要になるのは、このような意味においてである。

ここ数年の日本における韓流ブームは、日本にとってもっとも近い外国である韓国の文化を日本人に知らしめただけでなく、韓国の文化と日本の文化とを比較する視点を日本人に与え、自分たちの文化の特徴について考える機会をもたらしたという点で非常に意義あるものと言わなければならない。

もっとも、最近の韓流ブームにはある種の片寄りがあることも事実である。第一に、韓流ブームによって紹介される韓国文化は、ほとんど大衆文化に限定されているという片寄りがあり、紹介されているのは、映画、TVドラマ、ポピュラー音楽ばかりである。日本における韓国映画紹介のきっかけとなったのは『シュリ』（『췁리』、1999年）であった。韓国で600万人を超す観客を集めた『シュリ』は日本でもヒットし、それまで韓国映画を観ることのなかった日本の観客に韓国映画のおもしろさを印象づけることになった。それ以前は、韓国映画が日本で上映されることはあまりなく、韓国映画ファンである筆者などは、韓国映画を特集した映画祭や韓国文化院での上映会などにまめに足を運んで、数少ない機会を逃さないようにしていたのだが、『シュリ』以後は、多くの韓国映画が日本で上映されるようになり、韓国映画を容易に観ることができるようになった。とくに韓流ブームが起こってからは、めぼしい韓国映画はほとんど日本で上映されるようになり、同じ時期に何本もの韓国映画が上映されることも珍しくなく、うっかりして見逃す映画が出てしまうほどである。

現在の韓流ブームの原動力となったのは、韓国のTVドラマ、とくに『冬のソナタ』（KBS『겨울연가』、2002年）であったことはよく知られている。『冬のソナタ』は2003年にNHKのBS2チャンネルで放送されて注目され、2004年には地上波のNHK総合チャンネルで再放送されて人気に火がついた。（日本の地上波で最初に放送された韓国のTVドラマは『冬のソナタ』ではなく、2002年10月から12月にかけてテレビ朝日系列で放送された『イヴのすべて』（MBC『이브의모든것』、2000年）であった）。『冬のソナタ』は「冬ソナ」という言葉で喧伝され、主演俳優のペ・ヨンジュン（배용준）は「ヨン様」という愛称で呼ばれるようになり、「ヨン様」を知らない日本人はいないと言われるほどになった。『冬のソナタ』の大ヒットをきっかけにして、各放送局はこぞって韓国のTVドラマを放送するようになり、現在では、地上波や衛星放送（BSとCS）の数多くの局で最新

の作品から10年以上も前の作品に至るまでたくさんの韓国のT Vドラマが毎日放送されている（その多くは日本語字幕付きで放送されている）。『冬のソナタ』以前を思うと、まさに隔世の感がある。『冬のソナタ』以前には、韓国のT Vドラマを放送するのは衛星放送（CS）のKNTV局だけであった。今でこそKNTV局は韓流ブームの中で多くの視聴者を獲得しているが、『冬のソナタ』以前は、在日韓国人と特別に韓国に関心をもっている少数の日本人が視聴するだけで、日本の中で韓国のT Vドラマに対する興味はほとんど存在していなかった。

もう一つ、韓流ブームの中で人気を集めているのが韓国のポピュラー音楽、いわゆるKポップスである。韓流ブーム以前にも、チョー・ヨンピル（조용필）が「釜山港へ帰れ」（「돌아와요 부산항에」）などの曲で人気を博するということがあったし、キム・ヨンジャ（김연자）やケイ・ウンスク（계은숙）といった韓国人の歌手が日本の歌謡界で成功したこともあったが、韓流ブーム以前に日本で人気のあった韓国の音楽はたいていが演歌の系統に属するものであった（チョー・ヨンピルは日本では演歌歌手という受け取り方をされていた）。ところが、現在、韓流ブームの中で日本人の人気を得ているのはKポップスであり、ピ（피）やシンファ（신화）の日本でのコンサートには多数の日本人の観客が集まっている。日本でのKポップスのC Dの売り上げも順調で、中には日本のヒット・チャートの上位に入ってくる曲もある。

このように現在の韓流ブームの中で日本に紹介されている韓国文化は、もっぱら映画、T Vドラマ、Kポップスといった大衆文化に片寄っていて、これ以外の韓国文化の紹介はほとんどないに等しい。韓流ブームとともに日本に入ってくる韓国の音楽はKポップスばかりで、韓国の古典音楽、伝統音楽、歌謡曲（트로트）などはほとんど紹介されることがない。また、詩や小説といった文学作品も美術や工芸の作品も韓流ブームとは無縁である。

もう一つ、韓流ブームには片寄っている点がある。よく指摘されることであるが、韓流ブームの中で韓国の映画やT VドラマやKポップスに強い関心を示しているのは、主として日本人の中高年の女性たちであるという点である。筆者は東京都内に所在する大学で教鞭をとっているが、筆者のまわりの学生たちは、とくに韓流ブームに対して強い関心をもっているようには見えない。ここ数年、第二外国語として韓国語を選択する学生の数が増加しているのは確かであるが、履修者の増加は韓国語だけのことではなく、中国語をはじめとするアジアの諸言語全般について見られる現象である。このように20歳前後の若者たちが韓流ブームに対してそれほど強く反応していないのとは対照的に、昨今の韓流ブームの担い手の中心は中高年の女性たちである。韓国映画やT Vドラマに関連した雑誌や書籍を並

べた書店の韓流コーナーで熱心に立ち読みをしているのは中高年女性であるし、TVドラマのロケ地をまわる韓国ツアーの参加者の多くは中高年女性である。数年前、筆者が勤務する大学の隣にあるホテルにペ・ヨンジュンが宿泊したときには、ヨン様の姿を一目見ようと集まってきた中高年女性たちによってホテルの周りが埋め尽くされるということがあった。筆者が新宿の映画館にペ・ヨンジュン主演の映画『四月の雪』（『외출』、2005年）を観に出かけたときには、映画館の中は中高年女性で溢れかえっていて、結局、空いた座席を見つけることができなかった。立ち見で映画を観たのは、子供の時以来、数十年ぶりのことであった。

このように最近の韓流ブームで紹介される韓国文化は、映画、TVドラマ、ポピュラー音楽といった大衆文化に限定され、また、これらの大衆文化に強い関心を寄せているのは主に中高年女性であるという片寄りはあるが、現在ほど日本人が韓国文化に関心を寄せるのは今がかつてなかったことだと言えるだろう。韓流ブーム以前は、韓国に関心があるのは韓国研究をしている研究者、韓国の歴史や政治に関心のある知識人、韓国語を勉強している学生といった、限られた人びとであった。韓流ブーム以前に、韓国映画を特集する映画祭行くと、集まってくる観客のほとんどは、今なら「韓国おたく」とでも呼ばれるような、いかにも韓国マニアといった感じの人たちであった。ところが、最近の韓流ブームで韓国の大衆文化に関心をもつようになった人の多くは、それ以前は韓国に対する関心はなかった人たちのようである。ほとんど、韓国についての関心や知識がなかった人たちがちょっときっかけで韓国に興味をもつようになってるのが昨今の韓流ブームの実態である。たとえば、韓国のTVドラマに「はまった」人がインターネット上に韓国のTVドラマ（愛好者の間では「韓ドラ」と言われる）に関するホームページやブログを開設することがよくある。そのようなホームページの一つに、自分が観た韓国のTVドラマの感想を毎回書き込んでいく「韓国どらまちゃんねる」と題されたものがあるのだが、このホームページの中で、『ソウル1945年』（KBS『서울 1945』、2006年）の第16話に関して、「ドンウはアメリカにいるんだよね。あの教授さんとやらは、いったい何者なんだ…？」（「教授」とあるのは「博士」の誤りと思われる）という記述があった。『ソウル1945年』の第16話の最後で、アメリカにいるドンウ（이동우）がイ・スンマン博士（이승만）と初めて会う場面があり、その場面についての感想を述べているのだが、この感想は、このホームページを書いている人物はイ・スンマンが誰であるか知らないということを示している。つまり、イ・スンマンを知らない人が韓国のTVドラマに興味をもち、韓ドラのホームページを作っている、といったように、最近では韓国についての知識がまったくない人がどんどん韓国に興味をもつようになってい

である。

もう一つ、韓国人が聞いたらびっくりするような話を紹介したい。筆者が新宿の映画館で映画『JSA』（『공동경비구역 JSA』2000年）を観たときのことである。映画が終わって出口に向かって歩いていると、前を歩いている学生らしい若い男女の会話が耳に入ってきた。彼らは今観たばかりの『JSA』について話していたのだが、二人は、なぜ兵士たちが橋を挟んで対立していたのかがよく分からないようであった。つまり、彼らは韓半島が北緯38度線を挟んで南北に分断されていることを知らないのであった。これには本当にびっくりさせられたが、考えてみると、韓半島の分断も知らない日本人の若者が韓国映画を観に行っている、ということは、日本での韓国への関心や興味が以前とは比べものにならないほど広がっていることを示していると言えるだろう。

最近の韓流ブームの中で紹介される韓国文化は大衆文化に限定されていて、韓国文化に強い関心を示すのは中高年女性が多いという片寄りはあるが、日本人の間で韓国や韓国の文化に対する関心は確実に広がっている。そのような関心の広がりを支えているのは、なんと言っても韓国のT Vドラマである。映画は、映画館に出かけていって入場料を払わなければ観ることができないが、T Vドラマは自宅の茶の間でT Vのスイッチを入れるだけで簡単に観ることができる（ただし、一部の衛星放送は受信契約を結ばなければ観ることができない）。映画には、前衛性を強く打ち出した作品、高踏的な内容の作品、著しく実験的な作品など一般大衆が敬遠するような作品がしばしばあるが、T Vドラマの場合は、家庭の茶の間で家族がそろって観るものであるので、大衆の意識や考え方をよく反映している作品が多い。T Vドラマは、映画に比べてどうしても保守的にはなるが、大衆の生活に根ざした内容のものが多い。その意味で、現在、日本で数多く放送されている韓国のT Vドラマは、今の普通の韓国人の心情を知るのに手頃な媒体である。日本人の視聴者は、韓国のT Vドラマを観ながら、現在の一般の韓国人の心の中を知ると同時に、韓国人と比較して自分たち日本人の意識や心情を振り返って考えてみるのであり得るのである。

先に述べたように、筆者は韓国映画ファンであるが、韓国T Vドラマも大好きで（中高年の女性に負けなくらい）数多くの作品を観ている。もともと韓国や韓国文化に興味があり、韓国人の意識や生活ぶりについて知りたくて韓国のT Vドラマを観ているのだが、数多くのT Vドラマを観ていると、どうしても韓国と日本を比較する眼で観ることになる。そのようにして韓国のT Vドラマを観ていると、韓国のT Vドラマに特有と思われる点にいろいろと気づくようになってくる。その一つは、韓国のT Vドラマでは、大金持ちと貧乏人との対照を描く

ことが多いという点である。たとえば、『真実』（MBC『진실』、2000年）では、国会議員を父にもち裕福な家庭に育った娘が、その家の使用人の娘に大学入試の替え玉受験をさせる話であるが、二つの家庭の貧富の差が徹底して対照的に描かれている。2005年に自殺したイ・ウンジュ（이은주）が主演した『火の鳥』（MBC『불새』、2004年）は、大企業の社長令嬢と苦学生の恋愛、結婚、離婚、再会の物語であるが、前半では令嬢の家庭の裕福さと苦学生の貧しさが対照的に描かれ、後半では二人の貧富が逆転した状況が印象的に描かれている。『窈窕淑女』（SBS『요조숙녀』、2003年）では、極貧の家庭に育った主人公がステューワーズになって大金持ちの男性との結婚を目指す物語で、主人公の幼い頃の貧しさと主人公にプロポーズする男性の裕福さが対照的に示されている。韓国のTVドラマを多く観ていると、このような裕福な家庭と貧しい家庭との対照を強烈に描いた作品が多くあることに気がつく。『窈窕淑女』は日本のTVドラマ『やまとなでしこ』（フジテレビ、2000年）をリメイクした作品であるが、貧富の差を対照的に描いている『やまとなでしこ』をリメイクする作品として選んでいるところにも、韓国のTVドラマの一つの傾向が表れていると言えるだろう。このように韓国のTVドラマで富者の裕福さと貧者の貧しさが極端なまでに対照的に描かれるのは、おそらくある程度社会の実態を反映しているのではないだろうか。これまで総中流社会と言われてきた日本にも最近では下流と呼ばれる階層が出現しているという意見を述べる社会学者がいるが、日本の社会ではまだまだ貧富の差がそれほど大きくないようである。筆者の限られた見聞からしても、どうも韓国社会の方が貧富の差は大きいようであり、韓国のTVドラマはそのような韓国社会の一面を映し出しているようである。また、貧富を対照的に描いたドラマでは、ほとんど例外なく貧乏人は善人で金持ちは意地の悪い邪悪な人間として描かれているが、これは韓国の庶民の感情を反映しているのであろう。

もう一つ、韓国のTVドラマを観ていて興味深いのは、ドラマで描かれる韓国人の行動に儒教的なものが強く存在していることである。韓国では、目上の人の前では横を向いてタバコを吸ったり酒を飲んだりするし、目上の人と握手するときには、握手する右手に左手を添えるのが普通で、これらの仕草は韓国のTVドラマで頻繁に見ることができる。また、ドラマの会話の中には、「目上の人言うことには従わなければならない」とか、「目上の人には敬意を払わなければならない」といった言葉がしょっちゅう出てくる。韓国のTVドラマを観ながらこういった韓国人の仕草や会話に触れることによって、日本人は、いまだに韓国社会には長幼の序を重んじる儒教的な精神が存在していることを強く感じさせられるのである。もちろん、それらはある程度形骸化したものかもしれないが、それでも、日本の社会に比べ

て韓国社会は儒教的なものをまだまだ残していると思われるのである。

韓国社会に存在する儒教的な精神を強く感じさせられるのは、結婚が関わる場合である。筆者がそれを強く感じたのは、『雪だるま』（MBC『눈사람』、2003年）を観ているときであった。デパートの崩壊事故で両親を亡くした、仲のよい姉妹がいる。姉はステュワーデスになり、警察官と結婚する。妹は、義兄の頼もしさにひかれて婦人警官となり、義兄に対して密かに恋心を抱くようになる。そんなときに、姉が交通事故で突然に亡くなってしまふ。義兄は義妹の恋心に気づきながら、そしらぬふりをし続けるが……、といった具合に物語は展開し、義兄と義妹の恋愛と結婚は許されるかということが問題になっていく。おそらくこのドラマを観ていた多くの日本人は、互いに愛情をもっている義兄と義妹の結婚がどうして道徳的に問題になるのかよく理解できなかったであろう。日本人にとっては、二人の関係はあくまでも義理の兄妹という関係であり、血のつながりは全くないのだから結婚には何の問題もないのである。

同じような問題がテーマになっているドラマに『神様、お願い』（SBS『하늘이시여』、2005 06年）がある。ヨンソン（지영선）は、最初の結婚で女の子をもうけるが離縁され子供も手放してしまう。その後、男の子のいる男性と再婚し、現在は未亡人になっている。ヨンソンが手放した子供は養子に出され、ジャギョン（이차경）と名付けられ養家で辛い思いをしながら成長し、現在は美容師になっている。ちょっとしたことからヨンソンはジャギョンと知り合い、ジャギョンが離別した自分の娘であることを知る。ジャギョンはヨンソンが自分の実の母親であるとは知らないまま、二人は親しくなっていき、しだいにヨンソンは、自分の義理の息子であるワンモ（구왕모）とジャギョンを結婚させたいと思うようになる。そして、ワンモとジャギョンは義理の兄妹の関係にあることを知らないまま、ヨンソンの思惑通り愛し合うようになり……、という物語である。ヨンソンは、実の娘を息子の嫁に迎えるわけで、韓国人にとってはショッキングな結婚だが、しかし、息子とはいっても義理の息子であってワンモとジャギョンの間には血のつながりはない。したがって、日本人にとっては、たしかに特異な結婚ではあるが、ドラマの中で二人の関係が明らかになったときに登場人物たちが見せる狼狽や大騒ぎには、いまひとつ理解しがたいものである。このように、『雪だるま』や『神様、お願い』のような韓国のTVドラマは、結婚の問題を通して、韓国人と日本人の考え方の違いを浮き彫りにするのである。

もう一つ、韓国のTVドラマを観ていて強く感じることもある。それは、韓国人にとってアメリカという国がもつ意味である。多くのドラマで、登場人物が非常に困った状況に陥り、なんとか現状を打開したいと考えたとき、彼らは万事を解決する手段としてアメリカに行くのであ

る。多くは留学という形をとるのだが、数年間アメリカに滞在し、たいていは成功して、渡米前とはある意味で違った人間になって韓国に戻ってくるのである。たとえば『火の鳥』では、苦学生のセフン（장세훈）は大金持ちの社長令嬢でわがままなジウン（이지은）との結婚が破局に終わると、アメリカに留学し、青年実業家として成功して韓国に帰国する。『オールイン 運命の愛』（SBS『올인』、2003年）では、主人公のイナ（김인하）は窮地に陥ってアメリカに密航し、苦労の末にギャンブラーとして成功して韓国に戻ってくる。『黄金のりんご』（KBS『황금사과』2005 06年）では、学生運動で公安警察から追われているギョング（김경구）は姉ギョンスク（김경숙）の助けを得てアメリカに留学し、経済学の専門家として成功して韓国に帰国する。このように、多くの韓国ドラマにおいて、アメリカは人を生まれ変わらせてくれ、成功を約束してくれる国である。ペ・ヨンジュンが演じた『ホテル리어』（MBC『호텔리어』、2001年）のドンヒョク（신동혁）の場合は幼いときに養子としてアメリカに渡ったのだが、やはりアメリカで実業家として成功し、ホテル買収するために韓国に戻ってくる。多くの韓国のTVドラマでこのようなアメリカ観を覗いてみると、日本人と比べて韓国人の方がアメリカに対してはるかに強い憧れの気持ちを抱いているのではないかと思えてくる。過去に多くの韓国人がアメリカに移民していることを考えると、また、今も高校生のうちからアメリカへ留学する人たちが多くいることを考えると、韓国人にとってアメリカは本当に特別な国なのであろう。

このように、筆者は、韓国のTVドラマを観ながら韓国と日本とを比較しながら韓国の文化について、また日本の文化についてあれこれと思いをめぐらしている。たしかに、比較というのは新しい視点を与えてくれるのである。筆者が専門にしている文学研究の分野でも比較は有効な手法であって、ある作品とある作品、ある作家とある作家を比較することによって、一方だけを見ていたときには気づかなかったことが見えてくるのである。このような比較文学には二つのやり方がある。一つは、まったく無関係の二つの文学を比較するやり方である。たとえば、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』（Romeo and Juliet）と歌舞伎の『妹背山婦女庭訓』との間には直接の影響関係はないが、対立する二つの家の息子と娘が恋におちるという共通のモチーフがあり、その観点からこの二つの作品を比較するのである。もう一つは、直接の影響関係がある二つの文学を比較するやり方である。たとえば、アメリカ19世紀前半の詩人E・A・ポー（Edgar Allan Poe）の影響がどのようにフランス19世紀末の象徴主義文学に表れているかを探求するのは有効な比較研究となる。

韓国文化と日本文化との比較する場合には、この比較は、後者のような直接の影響関係がある二つのものの比較ということになる。誰でも知っているように、韓国と日本は、昔か

ら互いに影響を与えながら今日まできている。古代の日本は、当時の韓半島からやって来た渡来人がもたらした先進的な文化に負うところ大であった。筆者は、ソウルの国立中央博物館で2007年10月～12月に開催された「吉野ヶ里——日本の中の古代韓国」と題された展覧会を見る機会があったが、弥生時代の北九州から出土した遺物の多くが同じ時代の韓半島の遺物とあまりによく似ているのに驚かされるとともに、この時代の日本に対して韓半島がいかに強い影響力を持っていたかについて改めて思い知らされたのであった。

反対に、近・現代の韓国には日本の強い影響が及んでいる。もちろん、近代の韓半島に対する日本の影響は36年間にわたる日本の統治時代と深く結びついたものであるので、韓国の人びとにとっては愉快なものではないであろう。しかし、好むと好まざるとに関わらず、近・現代の韓国が日本の影響を強く受けているのは事実である。現代の韓国語の中に日本語起源の言葉が多くあることや、現代の韓国の制度や法律の中に日本のそれを模倣したものがあることなどを見れば、その事実を認めざるを得ないのである。

日本人は、欧米の文化に触れたときには、日本文化と欧米の文化の間の相違を強く意識する。ところが、韓国文化に触れたときには、相違だけでなく類似性も強く意識する。日本人から見て、韓国文化は、日本文化との間に類似点と相違点の両方をもった文化として見えてくる。「ああ、この点は日本とよく似ているな。けれども、あの点は日本とは全く違うな」ということを強く感じさせるのが韓国文化である。韓国のTVドラマを見ていると、このような気持ちになることがよくある。韓国のTVドラマを通して韓国社会での人間関係、家族関係、韓国人のメンタリティなどを見ていると、あるときには日本人の人間関係や家族関係やメンタリティとの類似性を強く意識させられ、またあるときには相違を強く意識させられる。日本人にとって、韓国文化の特徴を知ることは、結局のところ、翻って日本文化の特徴を意識させられることなのである。